

福祉厚生常任委員会視察研修報告書

氏名 阿部洋子

○視察先及び目的

・秋田県藤里町（引きこもり対策・支援事業について）

○視察日

平成30年10月24日

○視察報告

秋田県藤里町社会福祉協議会への行政視察を行いました。



視察内容は、引きこもり対策・支援についてです。

- ①実態把握から対策に至る経緯
- ②引きこもり対策・支援の実態
- ③対策を始めてからの効果の大きく3点についてです。



藤里町は秋田県の北部に位置し青森県との県境に面した9割を森林に囲まれた、世界自然遺産・白神山地の麓にある町です。

人口は3,300人、高齢化率46%、国道、駅、コンビニなしの町の社会福祉協議会が取り組んでいる「引きこもり支援」が全国から注目を集めています。

実際にお話を伺うと、引きこもり支援に特化した取り組みというよりも、「福祉でまちづくり」を合言葉に「地域トータルケア推進事業」の中にひきこもり（生活困難者）支援も含まれているという実感でした。

原点は秋田県が昭和55年に孤独死を問題視して開始した「一人の不幸も見逃さない運動」が起因しています。

① の実態把握から対策に至る経緯では、高齢者宅を訪問した際に出た会話の中から、近所にひきこもり（生活困難者）の人がいるということから調査を開始したところ、100人を超えるひきこもりの方がいらしたということです。

こまめに訪問し、最初はレクリエーションなどを提供したところ、ほとんど参加はなかったそうです。そこで視点を変えて、求職者支援事業を提供したところ参加率は高く、昼夜逆転していた方には伴走型の支援で無事修了し、就職につながっていったそうです。

② のひきこもり対策・支援の実態については、求職者支援事業を受講できるようになった方に伴走型の支援をし、無事修了、就職とありましたが、そのような受講を開始できない方に2、3ヶ月に一度新情報、「こみっと」通信やイベント、求職者支援事業受講募集のチラシを、社会との接点のない方に可能な限り届ける、家族以外の人間・外部の人間があなたが出てくるのを待っていますというメッセージを届け続けるこれが最も大切なことだと。

③ 対策を始めてからの効果として、求職支援事業受講により就職を果たせた方、しかし10年以上の長いひきこもりだったり、高卒資格もなく職歴がゼロ年だと履歴書の段階で除かれて採用面接までたどり着けないで就職できずいる方は、福祉拠点「こみっと」に登録します。そこでは「こみっと」バンクが請け負った一人分の仕事は何人がかりでも責任を持って請け負う。社会経験の少ない「こみっと」登録生も馴れてくると本来の力を発揮できるようになり一人で対応できるようになり、指名が入ってくるようになるそうです。

「地域トータルケア推進事業」の具体的な取り組みなどは以下の通りです。

平成27年には地方創生に福祉が関わることで、「人づくり」、「仕事づくり」、「若者支援」の3つの柱の下

「人づくり」ではプラチナバンク会員を募り、生涯現役の入り口として一人一人が活躍できる地域活性化人材バンクを創設。

プラチナバンクの働き方は収入、仕事時間、やる気、経験をさらに細分化して、多くの町民が活躍できるよう設定されています。

「仕事づくり」では他地域の視察を踏まえ葉っぱビジネスからヒントを得て、わらび餅の原料となるわらび粉がわらびの地下茎から得られることから、根っこビジネスとして4ヘクタールの町の土地に栽培。

また、地元の山菜や食材を活かした山菜バイキングを考案。

これは、藤里町農村環境改善センターで火曜日から金曜日までの11時30分から14時の間大人700円で食事を取ることができます。

無理なく続けられる事業展開を目指しています。

「若者の支援」では、藤里町体験プログラム（仕事を学ぶ、資格をとる、暮らし体験、仕事体験）を町外に開放して、福祉の拠点「こみっと」でひきこもり、不就業、障がい等の方々が社会復帰の活動をしています。

昼食はここで提供されている、こみっとうどん500円をいただきました。

讚岐まで視察に行っただけあって、最高に美味しいうどんで、汁まで全部飲み干しました。

森の恵みや里山に昔から伝わる食の知恵を用いた「和のおかず」2品が最近商品化された藤里グッドデリシリーズとして販売開始。

「白神まいたけキッシュ」は売り出した初年度は450万円の売り上げを記録し、29年度は558万円を売り上げたそうです。

このキッシュは事前に取り寄せて、委員会メンバーと試食済みで、とても美味しくいただきました。

規模の小さな町で年間売り上げをこれだけ出すということは中々難しいそうで、「白神まいたけキッシュ」はヒット商品です。

仕事を生み出し、情報をこまめに届ける。

この地道な作業が信頼を生み、「こみっと」バンクに登録し、ひきこもり（生活困難者）支援につながっています。

事業を行うには資金が必要です。

この資金は行政からの委託事業もあれば、独自に対象となる助成金を探し、提案し、獲得し報告をまとめ提出という作業がありますが、積極的にそこに取り組んでおりました。

その事業報告書をいただき、読み進めて色々と考えさせられました。

27年度に独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業報告書を読ませていただきました。

「孤立する人が生活に輝きを取りもどす事業報告」では孤立の問題は家族構成の問題とは違うと感じ、孤独死対策と孤立支援とは違う、違わなければいけないと痛切に感じて「孤立支援イコール一人暮らし高齢者支援」という思い込みの強さの前には余りにも無力だった。

だから、「孤立する人が生活に輝きを取り戻す事業」の実施にあたり、「孤立する人が生活に輝きを取り戻す事業」の対象者が誰なのか、その対象者名簿作成にこだわったとあります。

例えば老人クラブの活動に熱心なあまり、家族の中では孤立している場合や、一人暮らし高齢者に届ける「ふれあい弁当」は孤立支援につながっているのか等、従来の取り組み例と課題に取り組む作業は、あらためて孤立支援を考えさせられました。ひきこもり支援といっても、特別構えて行うというより、様々な取り組みの中に自然と関わられるように仕掛けていることが素晴らしい。

そこがここ藤里町の魅力なのかもしれません。

そこにはこまめな情報提供が日々行われているということです。

今後の課題としては仕事を産業として確立していくことだと話してくださいました。

余談ですが、藤里町は少子化の影響で幼稚園、保育園、小学校、中学校がそれぞれ1校に統合されています。

小さい時から一緒の環境で成長する中で、コミュニケーションが難しいお子さんも問題なく中学卒業まで過ごすことができても、高校に進学した途端環境に馴染めず問題を抱えてしまうお子さんがいるということでした。

ある意味、インクルーシブ教育や特別支援教育と言ったくくりで考えなくても、藤里町で暮らす子どもたちは良くも悪くも地域のつながりの中で温かく見守られているということのようです。

高校に進学した途端に馴染めなくなることに関しては別の角度からの支援が必要なようです。

以上のとおり報告いたします。

平成30年 10 月 25 日

取手市議会議長

入 江 洋 一 殿